THE GALLERY

もくじ　■特集｜アートマップ「てくてく彫刻マップ」と未掲載作品について
■企画展｜「new born 荒井良二　いつも しらないところへ たびするきぶんだった」「牛腸茂雄 写真展 “生きている”ということの証」「ニューアートシーン・イン・いわき　小森はるか＋瀬尾夏美」　■常設展示室から

特集｜special issue ―アートマップ「てくてく彫刻マップ」と未掲載作品について

当館では、今年3月にいわき市出身の人気イラストレーター・unpis（ウンピス）による、野外彫刻を紹介するための普及教材「てくてく彫刻マップ」を製作しました。JRいわき駅から当館までの街中に設置されている作品は、車社会のいわきでは目につきづらく、常にあるからこそ、見落とされがちなものでした。そのためこのマップを持って、街をお散歩しながら彫刻を見つけ、楽しんでもらいたいと思いました。ちなみに、このような野外彫刻を掲載したマップは全国にも多く存在し、美術館だけではなく自治体で発行している場合もあり、それぞれに特徴があります。

当館発行のマップでは、平地区の11体の彫刻を、あえて着色せずイラストで掲載し、作家名と作品名、そして制作年といった最小限の情報のみ付記しています。さらに、公共の施設以外は極力掲載せず、一般的な地図に掲載されている道路名や店舗などの詳細情報も省略しています。また、彫刻についての解説がついていないことも特徴の一つです。美術作品の場合、解説がついていると喜ばれることが多いのですが、逆に作品をじっくり見ることを妨げる場合も少なくありません。彫刻の写真をマップに掲載しなかった理由も、作品を実際に見に行ってほしかったからにほかなりません。このマップを見ながら街を散歩する人には、作品のサイズ感や色、質感を感じてもらいたいのと、自分なりの感想を持ってもらい身近にある美術作品に親しんでいただけると嬉しいです。

今回のマップの地区には、実は多くの未掲載の野外彫刻があります。個人や会社の敷地に私的に置かれた彫刻や、当館に隣接するいわき芸術文化交流館アリオス・中央公園内の6点の彫刻もそのうちの一部です。後者については、紙面上の理由もありますが、いくつかの作品の作家名、制作年、来歴について不明な点があったことが掲載を見送った要因の一つです。

図1. 太崔根《友誼》1987年、大理石（筆者撮影）

図2. 本多朝忠《平和の像（キューピッド像）》1956年、ブロンズ（筆者撮影）

駅前大通りや美術館に設置された作品とは異なり、中央公園にある彫刻は、記念碑として、そして美術館開館以前から設置されているものもあり、来歴を知るためには少なからず調査が必要で、当館には当時の状況を知ることのできる資料があまり残っていませんでした。そのため、今回はいわき総合図書館やいわき市役所広報広聴課が過去に展示・発表している資料や、新聞記事などから2点の彫刻についてご紹介したいと思います。

現在公園内北側に置かれている立ち姿の二人の女性が丸いシンボルを持っている大理石像（図1）は、友情を意味する《友誼》という題名が付されています[1]。台座裏面には、作家名、制作元が刻まれているものの、判読は困難でした。

---

[1] 「撫順市から友好の記念像」福島民友、昭和62（1987）年6月26日
[2] 同上。
[3] 「記念像が結ぶ友情」福島民報、平成4（1992）年9月26日
[4] 昭和32（1957）年4月25日に国道6号線ロータリー小公園に記念塔（噴水）設置。駅前道路整備に伴い昭和41（1966）年10月6日に平市民会館前広場へ、その後、中央公園整備に伴い現在の場所に移設された。『いわき平ロータリークラブ創立50周年記念誌　50年の歩み』いわき平ロータリークラブ、2005年参照
[5] 「キューピット像　除幕式」いわき民報夕刊、昭和32（1957）年4月25日2面
“いわき平ロータリークラブの歴史”、いわき平ロータリークラブ、（http://iwakitaira-rc.jp/about/history/）、最終閲覧:2024年7月30日
いわき地域學学會・小宅幸一著、いわき市広報広聴課編、“平駅前大通り2”、いわきの『今むがし』Vol.19、2015年3月25日、（https://www.city.iwaki.lg.jp/www/contents/1455184258773/index.html）、最 終閲覧:2024年7月30日
いわき地域學学會・小宅幸一著、いわき市広報広聴課編、“平市民会館→アリオス”、いわきの『今むがし』Vol.56、2016年10月5日、（https://

図3. ロータリーに設置された《平和の像（キューピッド像）》、『たいら市勢要覧』表紙、1960年、平市役所

図4. キューピッドと平市民会館・市誕生記念式典に集う人々（昭和42年3月、いわき市撮影）

当時の新聞[2]を見ると、本作はいわき市と中国・撫順の友好都市締結5周年を記念し、両都市間で交換して贈られた記念碑彫刻のひとつであることがわかります。そのため、円形シンボルの中には万里の長城と富士山が簡略的に表されており、女性たちはそれぞれ、チャイナドレスと着物をまとい、さらに、右側の女性は日本髪風の髪型をしています。中国と日本の特徴を端的に作品に表そうとした撫順の彫刻家・崔太根の意図を感じます。一方、いわき市から撫順へは、未来を表現した女性像《十六歳の夏》を贈っています。この作品は、アートマップにも掲載している《いわきの女》の作者である舟生厚（ふにゅうあつし）によって制作されました。2つの記念像を制作後、両作家は、一度中国で会い仲を深めたことが知られていますが[3]、その後再会できたのかどうかは定かではありません。しかし、二人の作品は奇しくもとても近い場所に設置され、現在でもともに市民の目を楽しませています。

もう一体は、アリオスの建物前の噴水中央に設置されています。緑色のブロンズ像と思われるこの彫像（図2）は、松ヶ岡公園に設置された旧磐城平藩主安藤対馬守信正公銅像を制作したいわき出身の彫刻家・本多朝忠（ほんだともただ）によって制作されました。台座には作家名が書かれており、近くに設置されたプレートからは、ロータリークラブの50周年記念（1957年）として本作が寄贈されたことがわかります[4]。いくつかの記事やいわき市の記録では、「キューピット像」（記事ママ）[5]と記載され浸透していますが、通常、キューピッド（ローマ神話に登場する神）は、弓矢や翼をもつ少年の姿で表現されます。しかし、本作をよく観察すると、踊る2人は男女の幼児で、水瓶のようなツボを頭上に掲げています。

本多は旧国道6号線ロータリーの小公園の記念塔・噴水につける彫刻として「平和の像」の制作依頼を受け[6]、これを制作しました（図3）。そのため、憩いの場にふさわしい楽しげな様子で、水が噴き出す[7]事物として水瓶を持たせた姿で表現したのかもしれません。また、東洋風にするために弓矢を持たせず、そしてポンペイから出土したツボを参考に制作した[8]ことも相まって、このような特異な表現につながったようです。この一風変わった2人のキューピッドは、ロータリーの小公園、市民会館広場（図4）の記憶を受け継ぎ、現在も中央公園で楽しげに踊っています。

今後も、これらを含む平地区の未掲載彫刻について調査を進めつつ、平から場所を変え、湯本駅前や勿来駅前の彫刻を紹介するアートマップの製作も構想しています。どうぞ、お楽しみに！

（学芸員　鈴木彩乃）

www.city.iwaki.lg.jp/www/contents/1475578924917/index.html）、最終閲覧:2024年7月30日

[6] 「『平和の像』が完成　新春に消防署前に建設」、いわき民報夕刊、昭和31（1956）年12月7日1面
「本多朝忠」58-59頁、展覧会図録『いわきの作家たち―いわきの美術シリーズ―』1987年、いわき市立美術館

[7] 当時は2人の幼児の持つ水瓶から噴水の水が勢いよく噴き出していたことがわかる。

[8] 前掲記事、註6を参照

〈その他参考文献〉
・いわき市史編さん委員会編『いわき市史　第6巻　文化』1978年、いわき市教育文化事業団
・いわき市立いわき総合図書館、令和５年度後期企画展「いわき駅前今昔～空中写真でみる街並み～」（会期：2023年10月27日-2024年5月26日）及びパンフレット

企画展｜new born 荒井良二　いつも しらないところへ たびするきぶんだった

9月7日（土）～10月20日（日）

多彩なジャンルで活躍するアーティスト・荒井良二(1956–／山形生まれ)。『あさになったのでまどをあけますよ』、『きょうはそらにまるいつき』など、彼の絵本を手にしたことがある人は少なくないでしょう。また、NHK連続テレビ小説「純と愛」のオープニングイラストで、その作風に親しんだ人もいるかもしれません。

さて、多くの絵本で知られる荒井さんですが、本展は絵本原画を並べるだけの展覧会ではありません。原画のほか絵画やイラスト、愛蔵品を並べた屋台、新作インスタレーションなどがにぎやかに会場を埋め尽くします。サブタイトルは「いつも　しらないところへ　たびするきぶんだった」。見知らぬ土地を旅するときのようなドキドキワクワクする気持ちで活動してきた荒井さんは、各地を旅するこの展覧会のため、会場ごとにメインビジュアルとなる新作を制作し、各館の空間に合わせて展示構成を考えます。当館はどんな会場になるのでしょう。そこに足を踏み入れた瞬間から、荒井さんとの「たび」がはじまります。

《遠くから船の汽笛 窓から入ったような夕暮れ 今日を歌え》
2024年　©Arai Ryoji

企画展｜牛腸茂雄 写真展 “生きている”ということの証

11月2日（土）~12月15日（日）

牛腸茂雄『SELF AND OTHERS』1977年発行　©Koichi Gocho

牛腸茂雄（ごちょうしげお）(1946–1983／新潟生まれ)は、3歳で胸椎カリエスを患い、生涯ハンディキャップとともに生きた写真家です。

10代からデザインの分野で非凡な才能を見せた牛腸は、高校卒業後に桑沢デザイン研究所へ進学し、戦後写真史に重要な足跡を残した写真家大辻清司と出会います。大辻の勧めで写真の道を歩み始めた牛腸は、創造の世界に没頭し、限られた命であることを自覚し、「“生きている”ということの証」として写真集の制作に力を注ぎました。

本展では、生前に制作された写真集『日々』(1971年)、『SELF AND OTHERS』(1977年)などに収録された作品と、未完に終わった『幼年の「時間（とき）」』の作品、および関連資料など約200点を展示し、「自分と世界との関わり」を探求しつづけた牛腸のまなざしに迫ります。

企画展｜ニューアートシーン・イン・いわき　小森はるか＋瀬尾夏美

11月2日（土）~12月15日（日）

小森はるか＋瀬尾夏美『11歳だったわたしは』2021–2023年、撮影：小岩勉
提供：せんだいメディアテーク

『11歳だったわたしは　いわき編』ワークショップの様子

当館が1991年から開催している「ニューアートシーン・イン・いわき」は、地域にゆかりのある現代作家を紹介する展覧会シリーズです。50回目を迎える今回は、アートユニット「小森はるか＋瀬尾夏美」を取り上げます。映像作家の小森はるかと、画家で作家の瀬尾夏美は、東日本大震災後にボランティア活動で東北を訪れたことを機に活動を開始。以降、岩手県陸前高田市や宮城県伊具郡丸森町など東北を中心に、東日本大震災や令和元年東日本台風といった災害に見舞われた地域で、人々の語りと風景の記録を行い、対話の場を生み出す作品を制作、発表してきました。

ユニットは東日本大震災後の人びとの語りを記録するなかで、11歳の頃に震災を体験し、今もそのことについて考え続けている人によく出会うと言います。そして「11歳前後で体験したことが、その後の人生に大きな影響を及ぼすことがあるのではないか」という仮説のもとに、あらゆる世代の人びとに、11歳だった頃の記憶を中心にインタビューし、映像と文章で記録する作品『11歳だったわたしは』を2021年から制作しています。記憶に残る体験や人生の契機、大切に感じていることなどの質問に答える語り手の映像と、インタビューをもとに構成した聞き書きの冊子を並べることで、およそ90年の時差のある個人史を総覧する場を展示室に作り出します。さまざまな世代の個々人の記憶、語りから、日本社会の歩みが手触りのある形で現れてくるという、見応え、読み応えのある作品です。

現在、当館での展示に向け『11歳だったわたしは　いわき編』をワークショップ形式で制作中。一般の参加者が、ユニットとともに、いわきに住むあらゆる世代の人々にインタビューを実施し、映像の編集と聞き書きの文章を制作しています。本展では、この『いわき編』を始め、テキスト、ドローイング、映像からなるインスタレーション作品を展示予定です。展示やワークショップを通じて、鑑賞者、参加者が、互いの語りに耳を傾け合い、相互理解を深めていくための契機となれば幸いです。

（学芸員　徳永祐樹）

常設展示室から

辰野登恵子
《WORK 84-P-8》1984年
259.0×194.0㎝
アクリル彩・カンヴァス
©平出利恵子　辰野剛

森村泰昌
《美術史の娘　王女B》1990年
210.0×160.0㎝
カラー写真、透明メディウム

いわき市立美術館は1984年に開館し、今年で40周年を迎えました。10月1日からの常設展ではそうした節目の年に合わせ、「新しい表現を求めて―1980–90年代のアート・シーン」と題して、開館前後の日本のアート・シーンに注目します。1970年代までは「ミニマリズム」や「もの派」、「コンセプチュアル・アート」といった動向に伴い、抑制的な、あるいはシステマティックでクールな作品が隆盛しました。そのような時代を経て、1980年代に入るころから、好景気に沸く世情も背景に自由で多種多様な表現を試みる作家が現れます。

辰野登恵子（たつのとえこ）は1970年代半ば、ドットやグリッドを用いたミニマルな版画作品を手掛け、70年代後半からは塗り重ねた絵具をパレットナイフで削り落とした重層的な色面と、S字や花柄、矩形といった装飾的なパターンの連続によって画面を構成する絵画の制作を始めます。色彩とイメージが分かちがたく結びつき豊かな絵画空間を生み出す辰野の作品は、当時の禁欲的な表現が流行していた絵画界に新たな可能性を提示しました。

一方、森村泰昌（もりむらやすまさ）は自らが歴史的な名画の登場人物に扮して撮影した写真を作品として残しています。出品作《美術史の娘　王女B》もスペイン美術の巨匠・ベラスケスによる《青いドレスのマルガリータ王女》（1659年）が森村自身とベニヤ板や布によってつくられたドレスや背景のセットによって再現されています。森村の作品は名画の中に自身を入り込ませることで既存の美術史観に一石を投じるだけでなく、他作品の引用やジェンダーといった当時注目されていた問題とも関連付けて論じられています。

展示室にはほかにも岡﨑乾二郎、吉澤美香、中村一美ら80年代以降に花開いた個性的で豊かな表現の作品が並びます。開館当時のアート・シーンを彩った作品たちをぜひご覧ください。

（学芸員　伊藤圭一郎）

今後の主な展覧会のご案内

企画展

new born 荒井良二
いつも しらないところへ たびするきぶんだった
令和6年9月7日（土）～10月20日（日）

牛腸茂雄 写真展 “生きている”ということの証
令和6年11月2日（土）～12月15日（日）

ニューアートシーン・イン・いわき 小森はるか＋瀬尾夏美
令和6年11月2日（土）～12月15日（日）

いわき市小・中学生版画展
令和7年1月5日（日）～1月26日（日）

第54回いわき市民美術展覧会
〈書の部〉令和7年2月7日（金）～2月16日（日）
〈絵画・彫塑の部〉令和7年2月21日（金）～3月2日（日）
〈陶芸の部、写真の部〉令和7年3月7日（金）～3月16日（日）

常設展後期

新しい表現を求めて―1980–90年代のアートシーン
令和6年10月1日（火）～令和7年3月30日（日）

後期Ⅰ　写真とアート
令和6年10月1日（火）～令和7年1月13日（月）

後期Ⅱ　見覚えのない形
令和7年1月15日（水）～3月30日（日）

2024年9月10日発行　編集・発行　いわき市立美術館　☎0246-25-1111　〒970-8026 福島県いわき市平字堂根町4-4